

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

在日コリアン一世女性のホスト社会への適応過程：
展示に表現された生活史から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金, 美善 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001542

在日コリアン一世女性のホスト社会への適応過程 展示に表現された生活史から

金 美善

1 初めてのコリアン展示

2004年3月25日から開かれた国立民族学博物館の特別展「多みんぞくニホン—在日外国人のくらし」(以下多民族特展)は、多面的で画期的な意味を持つ展示であった。なにより、日本に住む外国人の生活を展示するという発想は、まだ移民現象が社会全体に可視化していない日本社会において「いずれ、おとずれる共生社会のために」(庄司 2004)といった展示趣旨でも示されたように日本社会の今後の変化の兆しを予告し、暗示するユニークな展示であった。

一方、日本の移民として一世の歴史と最多数人口を持つ在日コリアンにとっても多民族特展は大きな意味を持つ。はじめて日本に生活するコリアンの存在や生活の様子を展示という形で他者に知らせることができたからである。現在、約660万のコリアンが海外に暮らしている¹⁾。海外コリアンは、日本の植民地支配に起因した日本、中国、ロシア、中央アジア地域への移住と、他に、戦後の韓国における労働力輸出によるヨーロッパ、移民奨励政策によるアメリカ地域への移住が多数を占める。異なる歴史的背景や政策によって海外に暮らしているコリアンであるが、共通していえることは、それぞれの地域でコミュニティの空間的存在性を可視化していることや、資料館、博物館を通じて自分達の歴史や生活の様子を記録保存していることである。

多民族特展の実行当時、日本にはまだ在日コリアンの一世に達する歴史的な経緯や生活文化を記録保存する資料館や博物館がなかった²⁾。また、地域空間に在日コリアンの存在が可視化しはじめたのも1980年代後半になって韓国から新しく留学生や駐在員などが来日してからである。不可視性そのものがかえって在日コリアンの状況、祖国とのかかわり、ホスト社会との関係性を比喩的にあらわすものであったがその点、多民族特展は、今まで注目されなかった在日コリアンの歴史を興味と関心をもって、形あるものとして、その存在を社会に示した点は画期的な事であるように思える³⁾。存在はあったが見えてこなかった歴史を可視化する作業こそがこの特別展の大きな意義である。とりわけ急激に減少している在日コリアン一世、特に女性の異国での生活の様子を知るための基礎資料を集めることは、急を要する課題でもあった。

以下は、こういった経緯を踏まえながら、在日コリアン展示で筆者が重点的にかかわっていた一世女性の異国での生活戦略やホスト社会とのかかわり方について、紹介

し、さらに展示のなかでいかに示そうとしたか、何を発見したかを述べてみたい。

2 展示する側とされる側

2.1 展示の主体

今回の展示の特徴のひとつは、外国人当事者や関係者が多く、展示をする側自身が展示される側ともなりうるユニーク性をもっていたことである。展示のコンセプトは、現在進行中の多民族化の実態を、できうる限り個人としての外国人をとおして知ることを第一目標にすることであった（庄司 2004）。このコンセプトから筆者は、さらに一般的な外国人像を描かせるものというより、具体的な生活の営みが展示を通して表現できればと思った。

私達は在日コリアンに対して与えられたいろんな情報から、客観的だともう印象を持っている。それがステレオタイプのなものであれ、個人の経験からくるものであれ、日本の全体概念として在日コリアンは限りなく暗く固定化された印象で語られていることを否めない。たとえば、在日コリアンに宿命的についでくる、差別・偏見という事実に基づく言説はそれが間違いのない真実だとしても、在日コリアンの人生がそればかりで語られるのは、一面的で偏った観点であると思えてならない。もちろん劣悪な環境で、生存のために苦しみ、生活の諸場面で排除され、疎外感、自信喪失といったいろんな不健康な社会を生きてきたのであるが、そればかりではなく、与えられた劣悪な環境に屈せず、生きる道を模索しながらたくましくホスト社会に適応していく、ダイナミックな移民戦略を重視し、むしろ、劣悪で不健康な社会だからこそ乗り越えて適応したときに感じる幸福感や達成感を、展示をとおして表現したかった。これらは、今までの在日コリアンを語る際にはあまり言及されなかった観点かもしれない。展示の基本理念として、差別・偏見と幸福は両立しにくいという固定観念をとりあえず、和らげる必然性を強く感じたのである。

幸いこのようなコンセプトは、全体の展示コンセプトと部分的に一致するところもあり、民族的な根を共有しつつも、ニューカマーという観点を持つ筆者が接してきた在日コリアンコミュニティについて自分にとってもっとも共感、または感動できた一世の生き方に注目したかった。展示する側の観点が先走った展示主体に対する客観性を導くのではなく、される側の主観性をありのまま、認めようとするのである。

2.2 ものの収集から展示まで

筆者はコリアンコーナーを担当したメンバーの一人として、展示の企画から、収集、展示作業までかかわったが、以前から日本でもっとも在日コリアンが集住する大阪市生野区周辺を長年フィールドワークしてきた経験が大変役に立った。青年団体の定期会合

や勉強会に参加して交流を深めることと、彼らの祖父母世代である老年層の家庭を訪問することで、在日コリアンコミュニティの世代間における多層性を知ることができた。特に一世への訪問調査では、多民族特展の構想に大変役に立ついろんなモノを観察することができた。なにより、実際の生活の様子を目の当たりに観察でき、一世とのインタビュー調査の際に語ってくれるライフヒストリーからは、展示のコンセプトから具体的なものの収集や配置までの設定を可能にするおおきな手がかりを得た。

筆者自身、韓国生まれで成人して日本に来ており、現代の韓国の生活文化の経験はあるが、日本の生活文化や在日の生活文化についての直接的な経験がない。その点、在日コリアンの生活文化をかえって客観的に読み取ることが可能だったかもしれない。訪問先で観察できる在日の生活文化は、かつて筆者が経験した生活文化とは異なるものであった。たしかに筆者が韓国のソウルで成長し、朝鮮南部出身者⁴⁾がほとんどである一世との地域的な隔たりや、一世がすごした植民地支配時期と筆者が成長した現代の韓国の時代的隔たりからくる異質性もあったが、それと同時に相違性と共通性、違和感と親和感の入り混じった体験をしてきた。

その一例として、たとえば、写真1の生活道具の展示資料にみえる穴があいた水汲みバケツのように、その用途については、使う当人でないとその意味がわからない生活道具が数多くあった。写真の穴が開いた水汲みバケツは、お餅を作る蒸し器が日本では入手困難なため、水汲みバケツに穴をあけて作ったものである。写真には写っていないが、隣の電気炊飯器の内釜も底に穴を開けてある。これも鋳物屋の一世がもともと蒸し器を作る目的で作ったものである。どうしてこのようにモノを変形してまで蒸し器にこだわるかについては、筆者の文化的知識の範囲で理解できるようなものである。韓国で



写真1 生活道具

は、冠婚葬祭には欠かせないシルトックと呼ばれるお餅が使われるが、ちょうどバースディケーキのような円形のお餅を作るため、かつては各家庭に蒸し器は必需品であった。特に、一世がもっとも大事にしている死者との交流をはかる文化儀礼であるチュサ（法事）にお餅は必ず備える品であり、一世にとって穴を開けてつくった水汲みバケツの蒸し器の意味は異国での文化維持を表すもっともシンボリックな存在である。

このような一世特有のモノの再編成は、蒸し器のようなモノばかりではなく、普段の営みからも多く発見できるものであった。筆者にとって、用途のわからない穴が開いたバケツの異質性は、違和感を引き起こさせるものであると同時に、それが使われる目的、文化的場面からは民族の根を共有する歴史的同質性、朝鮮半島といった同郷性を意識させられる多面的なモノだったのである。

展示では、このような訪問調査を経て収集したモノが多く展示されたが、特に生活文化に関連した具体的な説明がないと観覧者に理解してもらえないものが多かった。そのため、以下のようなキャプションをつけ、全体的な生活の様子を理解させる作業を行った。

【どんなくらしをしていたの？】

国をはなれて日本にくらししても生活内容は国での生活そのものであった。同郷者を中心にかく結束して生活したのはつらい異国暮らしを乗り越えるための生活の知恵だった。

めでたい日には晴れ着のチマチョゴリが街を彩った。キムチをつくり、空き地には故郷で食べていた野菜をそだて、日々の食卓に故郷を再現した。

ないものはつくってしまう。朝鮮餅を作る「蒸し器」、にんにくと唐辛子をすりつぶす「すり鉢」など、朝鮮料理をつくるためにはかかせない道具である。やがて、二世が誕生し、日本の文化ともまじわることになったが、定着当時から現在もなお一番大事にしているのは、祖国のしきたりどおりにとりおこなわれる冠婚葬祭である

在日コリアン展示の構成は、来日、生活、仕事、教育、夜間中学校、ニューカマー、活躍するコリアンという構成となっていたのだが、くらしにかかわる部分は主に一世女性の生活の営みが大きな展示要素となった。この部分を担当することになった筆者は、展示の手法として、自分がかかわってきた在日一世のライフヒストリーとして、その人生の局面をたどることにした。

3 展示にみる一世女性のライフヒストリー

多くの一世女性に共通する属性は、植民地支配をきっかけに来日し、異文化との衝突、差別と貧困を乗り越え現在を生きること、ほぼ100%の識字率を誇る圧倒的な文字情報社会を非識字者として生活してきたことなどである。来日当時から続いている経済活動や結婚後の出産や育児、内職、家計の切り盛りなど一世女性の「みえない」労働⁵⁾

も、一世女性を象徴的に規定するものである。

3.1 日本で暮らすこと

在日コリアン一世の日本移住は、強制連行、出稼ぎ、親族の呼び寄せなど様々な事情⁶⁾による労働力の流入が原因であった。一世女性の来日は、主に出稼ぎや親族の呼び寄せによるものであるが、女性の出稼ぎを象徴するのが女工として紡績工場へ就職することであり、親族の呼び寄せの場合、直系家族の呼び寄せとすでに来日している一世の男性との結婚による来日の場合も多くあった。両者に共通していえるのは、いずれも祖国での貧困⁷⁾をしのぐためのものとしての女性の労働力の流入であった事実である。

以下は、展示を通して紹介されたある一世女性の展示写真に現れるライフヒストリーを本人の証言とあわせてまとめる。

現在大阪市平野区に生活する呉福德さん(写真2後列左側)は1923年韓国全羅道生まれ。18歳(1941年)のときに日本にいる同郷の男性と見合いで入籍し、旦那さんの呼び寄せで渡航証明書(写真3)をもらって来日した。渡航証明書には、松原という旦那さんの日本名の苗字が書いてある。大阪に移住する前まで日本での生活場所は京都府の天橋立で、まわりには朝鮮人がたくさん住んでいたという。家族は旦那さんの両親と義理の弟、5歳になる亡くなった兄⁸⁾の子どもと6人家族で、子どもが生まれる前から子育てをした。甥っ子が大きくなって、自分の子どもが生まれた。旦那さんの仕事は土木の肉体労働。結婚して10年目に舅がなくなり、その三年後には姑がなくなった。姑



写真2 故郷で友達と(後列左側が呉福德さん)



写真3 渡航証明書

は亡くなる前に痴呆症の期間が長く、看病が大変だったという。周りの朝鮮人同士で集まり相互扶助の親睦会を作るなど、ほとんどの生活が故郷で行われたのと同様に営まれていたとされる。特に冠婚葬祭は故郷でのしきたり通りに行われ、以下の呉さんの語りに出てくるように異国であってもかなり具体的に実現されたという。

「それで、あの、その시아마이 돌아 가셨을때게 (舅が亡くなった時に) うん、大きな한국 (韓国) みたいに생여 만들어서네 (棺輿作ってね)、それで、みんな 어일 러일 (葬送曲の節) ゆって、歌いながら、韓国式に。そやから、その、宮津ゆう村がもう、もう、すごい、あの、どうゆったらいいかな、あんなみたことない。みんな、もう、花、花のあの、꼬깔 (御輿にかぶる花飾りの帽子) ゆうん? ああゆうのみんな맨들어して나 (作ってな)、そうして、五日も、十一月の、음력으로 동짓달. 동짓달 초닷셋날 돌아가셨는디 (陰暦で12月5日に亡くなったけど) 雪が降って、雪が降って、も、こんなんですよん。もう雪が、その中でもあんな초상쳐してんねん (葬式をしてんねん)」

(2000年4月収録 (括弧内筆者訳))



写真4 家族写真

舅が亡くなったときに、日本には当然ないはずである棺の輿を作り、また死者を見送る際に歌う葬送曲まで再現していた。また、棺の輿を担いで山にのぼる際の衣装の色や模様などが詳細に実現されていることがわかるが、このような今までみたことのない朝鮮人の葬式の風景について周りの日本人が驚いたことも語っている。

こういった徹底した民族文化の保持は、一世のこだわりでもあるが、特に、目うえの世代や死者に関しては、一層文化的色が濃くなり規範意識が厳しくなるのだという。ちなみに、現在も法事（チェサ）に対する一世の熱心さぶりは、祖国ではすでに簡略化傾向が進んでいるが日本では一世の来日当時のしきたりがそのまま維持されている場合が多く、宗教的なこだわりさえ感じさせられるのである。

一世女性にとってもうひとつの文化的こだわりは、チマ・チョゴリの民族衣装であった。めでたい日や遠方への外出など、晴れ着としてのチマ・チョゴリは、たとえそれが、朝鮮人を見分ける象徴性がたかく、朝鮮人に対する差別が日常的に行われた時代においても一世女性にとってその役割は変わることがなかったようだ。

しかしながら、このような民族文化へのこだわりや規範意識は、本人や子ども世代になると徐々に日本の文化と融合していく。たとえば写真5をみると、右端にたっているのが呉さんだが、民族衣装と下駄の取り合わせが、左端の人が朝鮮の履物を履いているのと対照的にみえる。写真6も、チマ・チョゴリにハンドバックとのミックスで、これは日本の西洋化に影響されたものであろう。こういった、日本文化とのミックスは、生活の諸場面で徐々にみられるようになってきているが、このことが実は、現在の在日文化を解釈するためのおおきな手がかりとなっている。現在はこのようなチマ・チョゴリ姿の在日コリアンの姿をまちかどで見かけることはなくなってきているが、コミュニティの式典、冠婚葬祭など室内で行われる行事ではまだまだチマ・チョゴリの活躍は旺



写真5 友達と遠足（二列目右側）



写真6 成長した息子と一緒に

盛である。

3.2 子育てと仕事

一世が来日した当時の朝鮮半島ではまだ儒教的な考え方が社会全体の規範に関与しており、男尊女卑の考え方が一般的であった。こういった一世女性の置かれた弱者としての社会的立場は来日後の在日コミュニティの社会においても変わりはないとされる。それに加え、非識字者としての情報入手の手段の不在は一世女性にとってもっとも生活に困るところだったという。コリアン一世女性の場合、朝鮮語、日本語いずれも読み書きができない非識字者が多く、朝鮮語の読み書きができない理由は、故郷で親に女は習う必要がない、習ってはいけないといった古い風習により習う機会を与えられなかったからだという。しかし、日本での生活で朝鮮語の読み書きより切実なのは日本語の読み書き能力の欠如であった。一世女性は男性より社会への参加の機会が低く、男性が仕事などで日本語との日常的な接触がある反面、女性は家事や子育てなどで家庭内にいる場合が多い。したがって、日本語の習得にはかなりの時間が必要であったとされる。特に読み書きに関しては高齢になるまでに非識字者として、長い間、文字情報との断絶からくる不利益を感受しなければならなかった。金賛汀(1985)は、在日コリアンの来日後の生活様式の変化について、男性のほうが女性よりも早く日本に溶け込んでおり、日本に渡ってきた朝鮮人が最も困った問題の一つに言葉の問題があるとした。実際、当時の大阪府が行った調査によると、在阪朝鮮人の日本語能力について、日本語の能力が女性の方が低く、全く理解できない女性が77.3%に達したという。

表1 在阪朝鮮人日本語理解度調査

	男	女	計
日本語を解する者	2,665	161	2,826
やや解する者	5,009	513	5,522
全く解せざる者	7,548	2,295	9,843

金賛汀 (1985: 107)

高い識字率を誇る日本社会で、文字の読み書きができないことは単に情報入手の不便さという物理的な障害だけではなく社会に対する劣等感と疎外感を感じさせるものでもあった。また、貧困と女性であることで学校に通えなかったこと、文字が習得できなかったことが生活のうえで確認されるたびに悔しかったと多くの一世女性が回想する。とはいえ、一世にとって全く文字情報が遮断されたわけではない。やがて子ども(二世)がうまれ学校に通い始めると、子どもが日本語を習得しその能力を家に持ち運ぶようになるのである。在日コリアンの言語シフトはほぼ二世代で朝鮮語から日本語へと交替する⁹⁾が、二世の場合、聞く能力を持ちながら話す能力が聞く能力ほどではない非対称バイリンガルが多い。ほとんどの二世が日本の義務教育をうけ、日本語や生活に必要な読み書きの能力が身につくことになるが、この日本語の能力は個人の能力であるだけではなく、家庭全体の言語能力にもなるのである。これらの理由もあり、学歴のない一世が二世教育に力を入れたのは、当然子どもの将来を期待した行為であると同時に自分に学校経験がないこと、十分に習えなかったこと、習いたかったことを次世代に賭けるといった代償心理が働いた場合も多かった。多くの二世は、読み書きができるようになると、家事や家業を手伝うのだが、親の内職の帳面の整理、内職先との書面上のやりとり、家計簿の記入など、小学校低学年から知的能力を発揮する実践的な手伝いをするのである。そればかりではなく、さまざまな面で二世は一世にとって日本社会との窓口の役割を果たしてきた。たとえば、学校からの行事や日程などのプリントを親に理解させることから学校との書面でのやり取り、役所関係の書類の申請から交付まで、二世の活躍できる場面やその内容は多様である。このような二世の一世への役割について、玄(2002: 46)は、読み書きのできない母の病院の問診の代筆などの経験から、小さいときから能力を備えて親を守らなければならない責任感を生じさせたと伝えている。

最近が多文化共生という概念装置が確立されつつあり、日本語の知識が不足している外国人を対象に多言語サービスが施されるなど公的に外国人が社会や行政に認識されるようになってきているが、そのような概念装置が全くなかった時代に二世は一世にとってホスト社会への架け橋的な役割を果たしてきたといえよう。

このように、一世と二世の間には「育てる」役割と「手伝う」役割といった家庭内において相互扶助のシステムが形成されるが、特に仕事の面でその機能が大きく発揮されていた。周知の通り、在日コリアン社会は現在でもなお、就職制限など法制度におい

て、日本人と平等な立場ではない。当時、朝鮮人が従事できるような仕事は単純労働が多く¹⁰⁾、女性にできる仕事はより限定された。なお、子どもが成長するに従って一世女性の仕事の場も家庭内に限定され内職中心になり、衣類やかばんなどの縫製の仕上げ、ヘップ（靴製造）、金属・プラスチック加工などがその主な内容である。なかには、資本金を手に入れ家族全員が従事する零細自営業として安定していく場合も多いが、いずれにせよ、常に日本社会に接している二世の役割が大きかったといえる。

こうした、家庭内の協力システムにおいて二世が役割を果たせるようになったのには、一世の生活戦略的な子育てがある。非識字者である一世自身の生活が同郷者を中心に固く結束したコミュニティ内での限られた生活圏で営まれたことに対して、二世には教育を通じて積極的にホスト社会に参加させようとした。なにより、学校経験のない一世女性の立場から二世へ同じ立場を繰り返すことは避けたいという親としての願望は、二世が学歴のレベルで多数派に劣ることなく日本社会で活躍していることで証明されている。

3.3 老後の生活——大人の中学生

今回の多民族展示では、東大阪市立太平寺中学校夜間学級から大々的な協力をいただいた。戦後の混乱期に義務教育未修者に教育の機会を与えるため設置された夜間中学校は、外国人出身者にもその門戸が開かれ、多くの在日コリアン一世が在籍している。仕事を引退した一世にとって夜間中学校はいろんな意味をもつ公的空間である。なにより、学校教育をうける機会に恵まれなかった一世にとって、夜間中学は日本の法制度で保障された教育に接する場所であり、実際、読み書き能力を身につける実践的な場所でもある。加えて、家事や仕事から引退してある程度生活の時間が確保できた一世にとっ



写真7 夜間学校で（中央左側）

て夜間学校は立派な社交の場にもなるのである。夕方から始まる教室に集まる生徒は、ほぼ同年代であり、授業が始まるまで教室は情報交換の場となる。入学式、遠足、見学、修学旅行、文化祭と、一年中続く学校の年間行事は60、70歳になってから始めて経験するものばかり。公園や美術館など、学割が利用できるれっきとした中学生として社会に通用するうれしきは格別である。しかし、なによりうれしいのは、夜間中学校で初めて文字を手に入れたことなのである。先生が優しく教えてくれる社会や歴史などの授業から世界が広がった。外国語の時間には朝鮮語を選択し、初めてハングルで自分の名前が書けるようにまでなった。故郷で親から女であるゆえ教えてもらえなかったウリマル（私達のことば）の読み書きが70過ぎてからできるようになったうれしきは計り知れない。もう少し若いころにできなかった悔しさがあるから、夜遅くまで頑張れるという。高齢でカリキュラム通りについていくのはかなりの努力が必要だが、いつの間にか名前がかけて、文章が書けるようになった。また、自分が表現したいことが綴れるようになったのである。夜間学校にはこのような生徒の成果が文集に記録してあり、展示の中ではこれらを公開し、日本人や子ども、孫に自分が生きてきた自分史を披露した。日本での異国暮らしは決して楽ではなかったけれど、それでこそ乗り越えて感じられる達成感がしっかり綴られていた。

4 まとめ

2006年3月15日の民団新聞には、うれしいニュースが載っていた。孝道（親孝行）をテーマにした「第2回MINDANエッセイ・コンテスト」の入賞者10人のリストに、呉福德さんの名前が載っていたのである。呉さんのエッセイの要旨には、呉さん自身が学校に行っていないので、子どもたちは学校に行かせたかった気持ち、貧しい家計を助けるため子どもが新聞配達や内職を手伝ってくれたこと、仕事で長男を失った辛さなどが綴られていた。必要であると思うものを獲得しようとする意思やそれを成し遂げる実践力、またそれを社会に向けて発信しようとする一世女性の生き方がぎっしりと詰まっていた。非識字者の多い一世女性の生活の様子が一世自身によってエッセイとして社会に発信されるのは珍しいことである。仕事を引退し、高齢で文字を手に入れた呉さんにとってこの入賞は重みのある画期的なことであった。その点、まさに多民族特展は、日本社会への発信ツールが制限された多くの外国人にとって自分自身の存在を知らせる大きな舞台であった。

展示の期間中には外国人によって上演された様々なイベントが設けられ、また展示にかかわった外国人やその家族、知人などが観覧者として来場した。外国人で賑う展示場の雰囲気がもう一つの生の展示を演出していたのである。実際、このような展示場の風景から観覧者は多くのことを感じていたらしい。筆者が担当していた大学の韓国語関連

授業で提出された展示の観覧後のレポートには、展示から知らされる具体的な事実だけではなく、展示場の中の外国人の存在に圧倒された、初めて在日コリアン、日系ブラジル人など外国人をみる事ができたなど、展示場の雰囲気について記述する学生が多かった。

展示に協力してくれた東大阪市立太平寺中学校夜間学級の生徒さんや自主教室ウリソダンの一世の方々、その他多くの一世や家族が展示を観覧した。なにより、実際展示に協力した一世の自分自身の生活や語りなど、本人達の参加によって完成した展示をみる一世の思いは格別だったと思う。

一世の歴史は苦勞ばかりではない。家族、特に子ども世代に能力を発揮させ、過酷な時代を乗り越えた。過酷だった分、濃密な家族関係を保ち続け、ホスト社会に適應する生活戦略を見せた。民族文化を大事にしながら他の文化を受容する寛容な生き方も一世女性の異国生活の知恵であろう。こうした在日コリアン一世の頑張って生きてきた歴史が展示されたことは、今後益々多民族化が予想される日本社会に、一世とは時代を異にして生活する他の外国人にも、共感とともに先着者のモデルとして残されると思われる。展示中には、京阪神の多数の民族学校が展示イベントに参加し、実地体験の一環として展示を観覧した。生活文化やモノを通して初めてコミュニティの歴史と触れ合う機会になったのである。一世女性が日本社会をいきってきた過程は、日本社会に、他の外国人コミュニティに、そして当の在日コリアンコミュニティに多くの意味を提供しているのである。その意味を具体化し、実感させたのが今回の多民族特展の大きな役割であったと思われる。



写真 8 自分の展示をみる呉福徳さん

注

- 1) 韓国外交通商部報道資料（2005年度在外同胞資料）による。
http://www.mofat.go.kr/mofat/mk_a006/mk_b037/1189818_634.html
- 2) 一年後の2005年11月24日、東京の麻布に「在日韓人歴史資料館」が設立された。在日コリアンの渡航前後の歴史的な背景、民族運動・教育、生活などを展示アイテムとする日本における初めての在日コリアンミュージアムである。
- 3) 実際、一年後の設立を準備中だった「在日韓人歴史資料館」の館長や実行メンバーが多民族特展のコリアン展示について、予備知識を得るため多民族特展の準備会にオブザーバーとして参加したことがある。
- 4) 一世の出身地は、九割以上が日本に近い韓半島の南部地域であり、現在の韓国の慶尚道、全羅道、済州島に故郷があるとされる（金英達 2003：34）。
- 5) 中谷（2005：126）は、女性たちがおこなってきた仕事の具体例として労働、賃労働など収入につながる労働と、いわゆる家事、子どもの世話など「支払われない労働」が含まれるとし、実際に農作業に従事していたり、家畜の飼育、手工芸品製作などを通じて収入を得たりしているにもかかわらず、「無職」「仕事をしていない」とみなされることなど女性の労働を「みえない」と指摘している。
- 6) 森田（1996）によると、終戦直前に来日した朝鮮人の来日目的は、一般労働者、国民動員計画に含まれた労働者（強制連行）、留学生の3種類に大別されるが、そのうち、来日者の主流をなしたのは、一般労働者であったとされる。
- 7) 徐根植（1995）は、在日コリアンの来日の最大要因となった日本の対朝鮮植民地経済政策を土地調査事業（1910～1918）、産米増殖計画（1920～1934）、強制連行（1937～1945）と指摘している。
- 8) 兄はもともと韓国にいたのだが、子どもが生まれる前になくなった。姑が韓国に行って子どもを引き取って、呉さんが嫁入りするまで育てたという。
- 9) 一世が定着していた当時は多くの一世は帰国を希望していた。そのため各地に朝鮮語講習所をつくり、帰国に備えて朝鮮語の教育が行われた。また、現在日本には68校の朝鮮学校がある。朝鮮学校では、一部の科目を除き、朝鮮語で授業を行い、徹底したバイリンガル教育を実現している。このような民族教育の一環として言語教育を受けた人たちの努力による朝鮮語の維持状況も無視できないが、コミュニティ全体のレベルからいえば、在日コリアンの言語は二世代で朝鮮語から日本語へとシフトされたとみて妥当であると考えられる。
- 10) 大阪の在日コリアンが従事していた仕事として、古鉄売買、土木、ゴム、プラスチックなどの仕事に、ホルモン（焼肉屋）、ハップ（サンダル製造）、パチンコなど日独自のエスニックビジネスに活路を見出す在日コリアンも少なくなかったという（朴 2005：56）。

文献

金 賛汀

1982 『朝鮮人女工のうた—1930年・岸和田紡績争議—』東京：岩波新書。

1985 『異邦人は君が代丸に乗って—朝鮮人街猪飼野の形成史』東京：岩波新書。

金 美善

2005 「夜間中学校」真田信治・庄司博史編『事典 日本の多言語社会』東京：岩波書店、125-

127頁。

金 美善・生越直樹

2002 『在日コリアン一世の自然談話文字化資料』（文部省科学研究費補助金「特定領域研究（A）（2）」『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究成果報告書』）。

金 英達

2003 『金英達著作集Ⅲ 在日朝鮮人の歴史』東京：明石書店。

玄 善允

2002 『「在日」の言葉』東京：同時代社。

桜井 厚

1995 「生が語られるとき—ライフヒストリーを読み解くために」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』東京：弘文堂，219-248頁。

庄司博史

2004 「いずれ、おとずれる共生社会のために—多民族化の息吹をつたえる」庄司博史編『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』大阪：千里文化財団，6-14頁。

徐 根植

1995 「在日朝鮮人の歴史的形成」朴鏡鳴編『在日朝鮮人』東京：明石書店，77-101頁。

杉原 達

1998 『越境する民—近代大阪の朝鮮人史研究—』東京：新幹社。

中谷文美

2005 「働く—性別役割分業の多様性」田中雅一・中谷文美編『ジェンダーで学ぶ文化人類学』京都：世界思想社，120-141頁。

原尻英樹

1997 『日本定住コリアンの日常と生活—文化人類学的アプローチ』東京：明石書店。

1998 『在日朝鮮人の生活世界』東京：弘文堂。

朴 一

2005 『「在日コリアン」ってなんでんねん?』東京：講談社。

森田芳夫

1996 『数字が語る在日韓国人・朝鮮人の歴史』東京：明石書店。